

サブカルチャーと“つながり”についての一考察

甲南大学学生相談室 長谷雄太

要約

本論では、サブカルチャーを通して生じる“つながり”について多角的に検討し、昨今のサブカルチャーに関する論の前提となっている「窓」の概念について、その「内界」の状態像を“なま”という概念に着目して論じた。そして従来の「窓」の理論におけるさなぎモデルに対し、現代では成虫の構造を想定したモデルもクライアント理解に有用であり、“なま”はそれらを繋ぐ概念として有意義であることが示された。さらに、セラピストとしての関係の取り方もモデルに応じて変化していく必要があることが示唆された。

キーワード：サブカルチャー、つながり、なま

I. はじめに

1. 学生相談とサブカルチャー

学生相談の現場で出逢う学生達の語りは、バラエティに富んでいる。履修や具体的な大学生活について知りたくて相談にやってくる学生もいれば、重篤な精神疾患・不調に関わる相談をする学生もいる。さらには「ちょっと誰かと話したい」「なんとなくここにいたい」というような、明確な目的を持たずに学生相談室を訪れる学生も多い。こうした間口の広さは学生相談の特徴の一つであり、それぞれの細かなニーズに応じた支援を提供できる強みとも言えよう。

一方で、間口が広いからこそその難しさもある。従来心理療法の対象は、現状に困っていたり不具合を感じていたりする人々であった。しかし、高石（2009）が学生相談の現場では「主体的に悩めない」学生が多くみられるようになったことを指摘しているように、学生相談は心理的な支援において基礎的な要素である“悩み”が不足しがちな現場でもある。しかし、“悩み”が語られないから全く課題を抱えていないというわけではなく、そ

うした学生の中にも心理的に取り組むべき課題があると見立てられることは多々ある。同様に、これは心理的な支援一般に言えることだが、近年の研究では本人が提示する“悩み”と、専門家が見立てる心理的な課題にズレが生じることが非常に多いことも示されている（Hatanaka et al., 2023）。そうした状況を踏まえて、学生相談に携わる専門家は、“悩み”として語られる内容だけでなく、一見本人の主訴・問題や症状とは無関係とも思えるような日常的な要素も捨て置かず、丁寧にこころの様相を見立て、描き出していく必要がある。

そして近年、特に学生相談やスクールカウンセリングの現場を中心に、マンガ・アニメ・ゲーム・アイドル・ポップミュージックのようなサブカルチャーとこころの関係性が論じられることが増えてきた¹⁾。こうしたサブカルチャーは、若者がその担い手となっていくことが多い。それ故に、学生相談やスクールカウンセリングのような思春期・青年期を対象とする臨床現場では、サブカルチャーについての語りを非常によく耳にする。そして当然、一つのコンテンツに対しての体

験の在り様や捉え方は差があるため、このサブカルチャーの語りは、先ほど述べてきたようなところの支援を行っていくうえで見逃せない要素と言えよう。また、サブカルチャーが語られる際、「ハマっているマンガ」「推しのアイドル」のように、それぞれの“好き”という感情が付帯することが多いという点にも注目したい。この“好き”という感情・体験は心理臨床において、どのように考えられるのか。笹倉（2023）は、“好き”なものがその人のところをよく表しているとし、その語りを通じてコンテンツそのものに表現されたところや、それを“好き”な人のところに思いを巡らせる姿勢の重要性を論じている。また、岩宮（2013）は思春期を対象とした臨床実践から、思春期のところの奥深くで起こっている体験には言葉が追い付かないことが多いが、アニメやマンガのような“好き”なものについて語る作業を通して、言葉としてはっきり表現できない心的内容が徐々に形を取って見えてくるとしている。実際、“好き”というの強い感情であり、高石（2009）が近年の学生が「悩む」ために必要な自身の情動を「言葉にする」力に乏しいと指摘していることを踏まえると、“好き”を言葉にすること自体にこの発達を促す可能性があるのだろう。このように、“悩み”を中心とした語りではなくとも、学生たちがところの課題に取り組む糸口をサブカルチャーは与えてくれているようにも考えられる。

2. “好き”と“つながり”

先述したように、サブカルチャーは思春期・青年期の人々の“好き”という感情に関わりが深い。しかし、サブカルチャーを通じて“好き”なものを語れば、即ちところの様相が詳らかになり、心理的に成熟するという単純な構図とも異なる。笹倉・荒井の『サブカルチャーのころオタクなカウンセラーがまじめに語ってみた』（2023）という書籍の推薦文として東畑開氏は「“好き”で心と心がつながる なんて素晴らし

いんだ!」と述べている。そして同書籍のエピローグは、編著者の荒井によって『好きなころがつなげたもの』というタイトルで括られている。ここでは“好き”を共有して、“つながり”が生じた先に起こる何かが想定されている。この“つながる”という事象は、どのような体験であろうか。辞書的には、「あるものと他のものとが、重なり合ったり、呼応したりして接続していること」という意味であるが、これは日常語であるため、臨床心理学の文脈においてどのように位置づけられるか検討することに意義はあるだろう。臨床心理学は二者以上によって展開される心理療法などを主な関心としており、否が応でも“つながり”について扱わざるを得ない学問でもある。ただ、いかに“つながり”を持ち、その“つながり”が何をもたらすのかは対象に応じて精査を繰り返す必要がある。

では、サブカルチャーがもたらす“好き”は何と何の間に、どのような“つながり”を生み、その“つながり”によって何がもたらされるのか。現代のサブカルチャーに関する研究では、“好き”なものについて語るプロセスの意義や語られるサブカルチャーに映し出されたところの要素について論じられることは多いが（例えば、西村, 2004: 笹倉, 2010: 名取, 2020: 川部, 2023など）、“つながり”という観点ではラポール形成や体験の共有という文脈に留まることが多い。加えて、サブカルチャーや“好き”なものについて心理療法で扱われる意義についての研究では、山中（1978）の「窓」の理論が参照されることが非常に多い。ただ、すでに山中が理論を構築してから40年以上が経ち、現代性という観点からも改めて論じられる必要があるだろう。

こうした問題意識をもとに本論では、サブカルチャーがどのように“つながり”に寄与するか、そもそもサブカルチャーを通じた“つながり”や“好き”という体験は何か、現代性にも着目しながら考察することを試みる。

II. “つながり”の多次元性

まず、“つながり”という体験には「あるものと他のものとが」とあるように、異なる2つ以上のものの存在が必要となる。そうした点も踏まえて、心理臨床において“つながり”という事象は、そもそもクライアント²⁾が心理臨床の場に“つながる”という所から始まり、セラピスト³⁾がクライアントと心的に“つながる”体験をすること、さらには心理臨床の場を起点にクライアントが他機関等の新たな場に“つながる”ことなど、多様な次元で捉えることができる。その中で、サブカルチャーを通して生まれる“つながり”を大きく3つの次元に分けて本論では考える。

1. クライアントと“場”の“つながり”

第一に、先述したようなクライアントと心理臨床の“場”との“つながり”である。心理的な支援の場に対して、抵抗感を抱えている人は少なからずいる。そもそも日本では、心理療法を受けることがまだ一般的とはいえず、支援を要する人々にとって何をすべきかわからないという戸惑いはあって当然であろう。特に、学生相談では青年期のクライアントが主な対象となる。成田(1989)は、「青年期はそれまで到達されていた平衡状態がひっくり返される、比較的安定の乏しい時期」であり、心理的準備が追いつかず、自他の評価も不安定となることを指摘し、青年期心性と境界例的特性の共通性について論じている。境界例の特徴の一つとして、安定した関係の持ちづらさが挙げられるが、大学生は発達課題として安定して“つながる”ことの難しさをそもそも抱えている可能性がある。そうした点を踏まえると、学生が支援の“場”を訪れるという行為は、それ自体が大きな展開と言える。だが、勇気をもって訪れたとしても、自身の問題・課題を語ることには相応の苦痛が伴う。誰もが、自らの本質的な課題は語り難いはずである。その苦痛に耐えきれずに、支援の場を離れるクライアントが多いことも

事実であり、心理療法家は持続的に“つながる”ことの難しさを痛感させられる。心理的支援について論じられる際、支援の方法や内容について注目されることが多いが、そもそも十分な支援を受けきるまで支援の場に“つながり”続けること自体が大きな課題となる。

こうした心理療法の前提となる課題に対し、サブカルチャーはどのように寄与しているのだろうか。笹倉(2010)は、「漫画やアニメは世界に確かに存在する“物語”であり、それについて他者に語ることは、何の指標もない状況において不確かな“自分”について語るよりも容易な作業である」としている。この容易さは、先述したような心理的な支援の場に“つながる”ことへの抵抗感を和らげる可能性があるだろう。実際、学校現場などでは、教師が学生を「好きなことを話すことのできる場だよ」等といった文句で、スクールカウンセリングの場に連れてくることが多々ある。本来心理療法の場は、時間や空間などの限定をすることで枠づけを行うことで、単なる日常の一部を切り出したものではなく、非日常的な性質を帯びる。思春期・青年期を対象とする教育機関の臨床では、その枠は緩やかになるものの、心理療法家の側に非日常性を帯びた枠を作り出す意識は重要である(長谷, 2023)。だが、いくら臨床的な意義があるとは言え、“非”日常性を追求することでその場に訪れることができなくなったり、全く留まれなくなったりすることは、支援ができなくなるという意味で本末転倒と言える。そんな中、クライアントが好むサブカルチャーは、限りなく各々の日常に根差しているため、サブカルチャーを通して語ることで、クライアントは日常性を保持したまま“非”日常的な枠に参入することが一部可能となるのではなかろうか。そうした意味で、サブカルチャーについて語ることは、各々の日常と心理臨床的な“非”日常空間を緩やかに“つなぐ”機能を持ち、心理的な支援のきつ

かけになるとも考えられる。そして同時に、心理療法のプロセスにおいていつでも、クライアントはサブカルチャーの話題に頼ることができる。このことは、治療という観点では心理的な抵抗としても捉えられる可能性もあり、メリットだけではないが、ある種クライアントにとっての安全装置としての機能を果たし、先述したような支援の“場”に“つながり”続ける動きを促すのではなからうか。

2. クライアントとクライアントのこころとの“つながり”

前節では“場”に“つなげる”機能について論じたが、それはあくまで心理的な支援が開始される端緒であり、さらに深い次元での“つながり”にサブカルチャーが寄与するには、より専門的な視点が必要となる。心理療法が始まると、クライアントは多かれ少なかれ自らについて語る必要がある。しかし、この“語る”という行為は、前節でも述べたように、相応の困難が伴う。坂部（1985）は、〈はなし〉の語源が〈離す（端成す）〉であって、より直接的であるのに対し、〈かたる〉の語源が〈象る〉にあり、いったん分節化されたものを形作る作業、すなわち反省、誤り、隠蔽など「騙り」の側面をもつ意識的統合度の高い行為だとしている。そのため、自らの体験を体系的に〈かたる〉ためにはある程度の統合性を持った主体が必要となる。坂部の論をもとに笹倉（2010）は、思春期・青年期のような主体の揺らぎを体験している最中にいる者にとっては、自らのことを〈かたる〉ことは易しいことではないと論じている。さらに笹倉は、「同一性や主体の不確かさを抱えているクライアントが“自分”について語るにあたって、マンガやアニメという具体的に外在するものについて〈はなし〉ながら、それらとのつながりのなかで“自分”を〈かたる〉という語り方をすることは、クライアントの同一性や主体の不確かさを補うようなはたらきを

もつのではないだろうか。」（傍点引用者）としていっている。つまり、直接“自分”について〈かたる〉ことができない場合でも、サブカルチャーについての〈はなし〉を媒介することで結果的にクライアントが“自分”を語ることに近い展開が生じる。つまりサブカルチャーは、クライアントと笹倉の言う“自分”との間を“つないで”いることになる。ここでの“自分”は単純にクライアントをそのまま指すというよりは、クライアントの意識されない部分まで含めた全体を指していると考えられる。

臨床心理学、特に力動的心理療法の分野では、人のこころにはアクセスすることが難しい領域があるとされることが多い。古くは Freud の局所論から、「無意識 Unbewusst」として知られている領域は、意識的には感知できないとされてきた。しかし、無意識は各々に確実に影響を与えているもので、無意識の内容に到達する手段として Freud は夢を重視した。笹倉が述べてきた“自分”は、このような性質を帯びるもので、その内容に到達するためには何らかの手段を要し、サブカルチャーはその手段になり得る。笹倉は別の論文にて、危うさを孕む思春期の異界体験にアニメを通じて取り組んだ事例を挙げ、「思春期の内的世界と呼応し、共鳴しあうような特別な物語は、異界体験を促進させる触媒になりうる。同時にそれは、異界のもたらす破壊的なイメージからその人を守り、また異界での体験を現実の人生へと接続していく作業をするための器としても機能する」（笹倉, 2022）と述べている。「無意識 Unbewusst」も「異界」も、簡単には踏み込めない領域であると同時に、危うさを孕むものであり、内的な混乱が多発する思春期・青年期であればなおさら危険が伴う。そうした領域への安全な“つながり”をサブカルチャーがもたらすとも考えられる。

こうした、特に思春期・青年期に、サブカルチャーがクライアントの心的な内容物を反映するという理論モデルの多くが、山中（1978）の「窓」

の理論に依拠している。「窓」は多くは趣味という形で開かれているクライアントの興味の志向性で、思春期のクライアントが語るそうした「窓」の内容には、投影や同一化の機制によってクライアント自身の内界の発達や変容の状態が明瞭に表現されているとされている。ここで「窓」はサブカルチャーを内包する、より広範囲をカバーした概念と言えるだろう。そして、「窓」というメタファーに示されているように、このモデルでは明らかに「窓」が外界と内界という区切られた二項を“つなげる”ものとしての機能を持っている。単純に読み取るならば、それはクライアントのこのころの内容に外側から“つながる”ための「窓」であり、そのころの内容はこれまで述べてきた、「無意識 Unbewusst」のようなものと言えるかもしれない。この「窓」と「窓」が“つなげる”内界については、次章でさらに詳しく検討することとしたい。

3. 他者とクライアントとの“つながり”

サブカルチャーが語られる時、そこには語り手と聞き手が存在する。本論では、語り手はクライアント、聞き手はセラピストとなる。ここで、セラピストはただ語りを漫然と聞くわけではなく、何らかの専門的な姿勢を持って語りを聞くはずである。そうした専門性の一つに、クライアントへの共感的な態度が挙げられるだろう。Rogers (1975/2001) が、カウンセリングに必要な条件として「共感的理解」を掲げたことは有名で、今でもこの「共感」という概念は重要視される。一方で、馬場 (1999) は「共感的理解」が一種の理想論であることも指摘しており、完璧な共感を達成することは、他人である以上不可能に近い。しかし、共感が深まる重要性について鳴岩 (2017) は成田 (1999) の事例を例に、「セラピスト側が自分の感覚を、内面を見つめる方向へと深く掘り下げていくうちに、‘苦しみをもつ人間という意味で同じ地平に降り立った’ことが治療的に重要

だった」と考察している。さらに、同じ人間としてもつ苦しみや葛藤の感覚に到達することでセラピスト側から発する情動レベルのコミュニケーションに変化が生じることになり、「その変化はクライアントに‘わかってもらえている’や‘支えられている’といった感覚を生じさせる」と論じている。このように心理療法において一定のポジティブな効果をもたらすとされる共感とは、セラピストとクライアントが心的に接点を持つという意味では、臨床心理学における“つながり”の一つの形であると考えられる。

では、サブカルチャーがこの共感という事象にどの程度寄与できるのか。先述したように、サブカルチャーの語りを通してセラピストはクライアントの内界に“つながる”可能性があるものの、それは必ずしも共感と同義ではないだろう。共感という次元に達するためには、鳴岩の言うように、同じ地平に降り立つような、同質性⁴⁾の高い体験が必要である。筆者はその前段階として、“共有”という営みがあるのではないかと考える。共感とは“共に感じる”ことであり、“感じる”という主観的で本質的には本人しか体験できないものを他者も“共に”するというものである。一方で共有は“共に有する”ことで、“有する”ことは有する対象があれば十分に可能であり、共感よりも易しい。突き詰めると、共感とは誰かの情動・感情を共有することとも言え、共有にもスペクトラムがあると考えられるが、心理療法では共感の域には到達しない共有を繰り返しているのではなかろうか。共有について河合 (2023) は、心理療法において言語的なレベルではない共有が生じないと本当の関係はできないとしている。さらに、人が亡くなっていく時や人が亡くなった時、「つながる」ということが非常に重要で、人は亡くなる時に家族あるいは自分の祖先とつながっているという感覚を持ったり、あるいは最後にセラピストとどこかつながっていたりすることが安心感に通じるとし、地縁や血縁による“つながり”の感

覚が薄れていく中、心理療法は「共有」という点で貢献できると述べている。つまり共有という形で“つながる”体験を提供すること自体、心理療法の意義として考えられる。深い次元での共感的理解を目指すことは重要ではあるものの、クライアントの深い部分にはあまり触れない水準だとしても共有の試みを繰り返す努力を怠らない姿勢がセラピストには必要だと言える。

そうした点を踏まえて、サブカルチャーは共有という営みに非常に適した素材ではなかろうか。サブカルチャーは、確かに対象として存在していて、その体験は多様であれ、誰もが認識できる。現代においてサブカルチャーはもはや“サブ”とは言えないほどメジャーなコンテンツを含み、多くの人に共有されている。あるサブカルチャーを“好き”になるということは、“好き”の内容に差はあれ、そのコンテンツをこの世界の誰かと共有しているという感覚にもつながり得る。さらに、心理療法の場面でも、クライアントの感情のように曖昧なものと比較すると、よほど共有がしやすい。心理療法において、サブカルチャーについてクライアントが語り、セラピストがしっかり聞くというやり取りを経て、それらが共有され、クライアントとセラピストの間に接点が少し増えるのである。そしてそこで生まれた小さな“つながり”を強固にするという意味で、セラピストがクライアントによって語られたコンテンツについて丁寧に知っていくことは重要であろう。現代は、大量のコンテンツに誰もがアクセスできる時代であり、語られる内容も多種多様である。当然セラピストが知らないコンテンツも語られるはずだが、そのコンテンツに対して興味を持って、知る作業をしている最中にも、クライアントとセラピストの間の“つながり”は醸成されているのではなかろうか。ただ、病態水準や主訴によっては“つながり”が強まるのが治療的意義を持つとは言い難い事例も数多くあることには留意しておく必要はあるため、丁寧な見立てが前提になる。

Ⅲ. “さなぎ”の内側の世界に出逢うこと

前章では、サブカルチャーが寄与する“つながり”を3つの次元に分けて述べた。本章ではさらに、山中（1978）が提唱した「窓」が“つなげる”「内界」とはどのような様相を呈しているのか、さらに「内界」と“つながる”うえでセラピストにどのような姿勢が求められているのかを考察する。

1. 思春期・青年期における“さなぎ”イメージ

「内界」について考察する前に、なぜこうした議論の対象になる時期が思春期・青年期であるかという点についてまとめたい。山中の「窓」の概念は思春期を対象とした臨床実践に依拠したものであった。思春期と青年期の異同については諸説あるが、学術的には青年期が思春期を内包する概念とされる。梅村（2014）は、それぞれの語源から思春期が身体的変化に重きを置いた概念で、青年期が思春期と大部分を共有しながらも心理社会的な存在としての変容過程に重心を置いた概念であるとして区別しつつも、心理学的に一つの明確な理論的枠組みが共有されているとは言い難いとしている。年齢としては概ね10代から20代が当てはまるとされており、学校段階としては小学校高学年から大学生に相当する。ここで思春期と青年期という概念の区別はあれ、双方に共通するとされるのは心身の急激な変容であろう。前節では成田（1989）の論を引用したが、思春期・青年期は他の発達段階と比較して、身体的にも心理的にも社会的にも急激な変容が起こることによって均衡状態が崩れ、不安定となることが多いとされる。そうした点に重きを置いて、本論では思春期と青年期を区別せずに用いることとする。

そして、思春期・青年期の劇的な変容の様子を河合（1992）は「さなぎの時期」と表現している。さなぎは、昆虫が幼虫から成虫へと至る過程において、成虫になる直前に成虫によく似た形

でほとんど動かずにいる時期・状態のことを指す。さなぎを経て成虫になる様式を完全変態というが、この場合多くの成虫は幼虫とは全く違う姿となる。さなぎの外見は成虫に近いもので、大まかな形態が形成された鋳型に包まれている。注目すべきはその中身で、これまで幼虫の体を構成していたものが一部の神経・呼吸器系を除いて溶解し、ドロドロの状態である。その状態から時間をかけて、成虫へと劇的に変容していくのだ。この変化は、いわゆる階段状の発達モデルとは異なり、ほとんど生まれ直しもいえるプロセスである。人のこころの発達について河合（1987）は「子どもは思春期に達する手前の時期にいったん完成の域に達する」としているが、まさに思春期・青年期は昆虫と同様に、これまである程度完成していた状態がほとんど崩れ去り、心理的に新たな状態に生まれ直そうとする動きが起こっていると考えられる。ここで、完全変態を行う昆虫の一部は、さなぎの周りをさらに覆う“繭”を形成する。山中は思春期のクライアントが一時期引きこもったりする様子を、“さなぎ”のイメージと並べて“繭”にこもる様子になぞらえて論じている。言葉として、“さなぎ”は状態像、“繭”は昆虫の作る物体なので、それぞれの成り立ちは異なるが、本論ではこうした思春期・青年期の不安定な時期に何らかの形で外界から閉じた状態に至り、その中で徐々に変容が起こっていると理論を総じて“さなぎモデル”と呼称することとする。

2. “なま”という概念の導入

さなぎモデルに即すと、山中が「窓」の論で述べている思春期の「内界」は繭の中のさなぎ、もしくはさなぎの中身のようなイメージで捉えられていると考えられる。繭の中のさなぎは少しの刺激で崩壊する脆弱を持ち、そのさなぎの中身は形を成さない未成熟なものである。では、この未成熟とはどのような状態であろうか。本論では、この状態を考察する上で“なま”という概念を想定

したい。日本語で“なま（生）”という語は、「物が十分にされていないこと、未熟」という意味を持つ。これは古語においても同様で“なま”は「不完全な、未熟な」や「中途半端に、なんとなく」といった意味となる。思春期・青年期の内界の状態は、先述したように形が崩れ去り、ドロドロの未熟な状態である。この形を成さない、外界に開けていくためには未だ不完全な状態は、ころとしては“なま”の状態とも表現できる。このままただただネガティブな語のようであるが、元来“なま”は「若い」という意味で、それが良い意味では「なまめかし」のような美的感覚の語を生み、悪い意味では事柄や動作・状態などの不完全で、いやな感じを表すようになったともされる。つまり、“なま”とは「若い」と同時に「未成熟」な状態であると言える。その意味では、乳児期の原初的な発達段階も“なま”の状態と考えられよう。ただ乳児期は外・内の区別がなく“なま”な状態から発達していくのに対し、思春期・青年期は“さなぎ”という「鋳型」や“繭”があり、その「内界」が“なま”である区分があるという点で両者は大きく異なる。また、高知県幡多郡や茨城県久慈郡八溝山麓地方では血のことを“なま”と呼ぶ（山中, 1993）。こうした表現に見られるように、思春期・青年期における“なま”の概念において、“内側にある流動的で形を成さないもの”というニュアンスは重要であろう。

さらに、「生魚」「生肉」といった言葉が示すように、“なま”には「自然のまま、手を加えていないもの」という意味もある。食材を例に用いると、“なま”の食材は火を通したり発酵させたりすることによって、安全で安定した状態になる。人のこころも同様に、“なま”の状態からなんらかのプロセスを経て、外界に適応していける状態に至る。ただ、食材と違い人のこころは簡単に対象化できず、個々の差も非常に大きいため、手を加えたら良いというものでもない。さらに、人のこころに関して力動的心理療法の観点に則れば、

意識的な操作によって「自然のまま」の“なま”の部分が無くなってしまふということはある得ない。“なま”ではない、外界に適応する部分を発達させながらも、こころの中の“なま”は残っている。そうした点も踏まえると、“なま”は人のこころに準ずる概念として親和性が高い。

そしてもう一点、“生々しい”という語が「今できたばかりのようである。真新しい感じがする」という意を表すことや「生放送」のような語が示すように、“なま”には「今まさに起こっている、生み出されている」という意味がある。思春期・青年期のさなぎモデルでは、「内界」はまさに今この時に変容している最中にあり、一見静的なさなぎや繭の外観と反して動的なニュアンスが多分に含まれる。そうした意味で、さなぎモデルの「内界」の状態を表現するという点において“なま”という語は適していると考えられる。

3. 「窓」の理論における“なま”との“つながり”

「窓」の理論において山中は「内閉をできる限り保証してやる。彼らの話に《耳を傾け》、しっかり患者の《内的な旅》の同行者として付き合い、ひたすら彼らの《内的成熟》を待つ。」という治療方針を述べているように、セラピストには見守る姿勢が求められる。しかし、それはただ当事者に委ねればよいという意味ではない。土井(2021)はさなぎを見守るプロセスにおいて様々な水準でセラピストが関わり、ときには見守るとは一見矛盾した積極的な介入が行われる場合もあると指摘している。そして、さなぎはただ“閉じている”のではなく、「窓」という限局されたルートを通して世界と関わりつつ自身の在り方を模索しており、周囲と関係し、周囲を深く巻き込む形で成熟のプロセスが進行していくとした(土井, 2022)。山中のいう「《内的な旅》の同行者として付き合い」という点も、このようなクライアントのプロセスに適切に巻き込まれていくことの重要性を述べているものと言えよう。

ここで、「窓」は、“なま”の状態のこころにとって定点であり、成熟のための軸の働きを持つとも考えられる。土井(2022)は、さなぎのプロセスと適切に関わる中で、やがてくる「啜啄の機」を逃さずにいることができると論じている。これまでの形が大きく崩れ去った状態では、新たなものを創り上げるための拠り所に乏しい。そんな中、「窓」から差し込む光が、灯台のように成熟のプロセスを支えているとも考えられる。実際、昆虫の変態のプロセスにおいても、さなぎの内部は溶解されているとはいえ、全て液状になっているわけではなく、一部の神経系と呼吸器系は保たれている。この神経系と呼吸器系が成熟を支えている可能性もあり、何らかの軸の必要性が示唆される。さらに、土井の述べるように思春期のさなぎの状態において、「窓」を通して世界と関わるという外界に開けた部分があるとすれば、「窓」を通してセラピストとクライアントの“なま”が“つながる”ということは可能であろう。それは混沌とした地獄にいるカンダタに蜘蛛が糸を垂らしたように、主体を引き起し、生まれ直すための起点となり得ると考えられる。閉ざされた「窓」の外側から内側を見守る姿勢だけでは、成熟のための支点としては不十分で、時には内側に手を差し伸べる姿勢も求められるのではなかろうか。ただ、さなぎの中身が不安定で、多少の刺激でさなぎ状態の虫が絶命するように、“なま”には特有の脆さがある。思春期・青年期における“見守る”という静的な姿勢も、この脆さを踏まえたものといえよう。ゆえに、心理療法においても、セラピストの側が「窓」からさなぎの内部に侵入し、無理に関係を持つ姿勢は推奨されてこなかった。ここからは、さなぎモデルにおける“なま”の主体から「窓」の外側への動きについてサブカルチャーを例に挙げて検討し、セラピストが取り得る姿勢を論じていきたい。

4. サブカルチャーと“好き”

サブカルチャーは多くが、そのコンテンツを楽しむことについて、高い素養・教養を必要としない。ハイカルチャーと比較すると、より多くの人に垣根無く開かれていると言えよう。だが、誰もが同じように触れられるコンテンツであるがゆえに、こころの“なま”にアクセスするための「窓」としては、画一的で形骸化したものになる可能性がある。サブカルチャーについて語られたとしても、「みんなやっているから」というようなクライアントの主体がコミットしない状態では、「窓」の本質的な機能を果たせない。そこで重要になってくるのが、サブカルチャーについての語りについて付帯することが多い、「好き」という感覚ではなからうか。

この“好き”という語は、辞書的には「心惹かれること、気に入ること」といった意味を持つが、“好き”という表現以上に細分化が難しい感覚であろう。「惹かれる」という語自体が「好意をもって意識を向けるようになる」という意味を持つように、この「好意」や“好き”という感覚は意識に先立つものである。ここで、“好き”という感覚は自然なまま湧き上がってきたものであるという点で“なま”な体験と言えるだろう。石塚真一の『BLUE GIANT』というマンガの主人公である宮本大は、中学生の時に友人に連れられジャズの演奏を聴き、魅了される。以降、どんな日でも練習を欠かさず成長を遂げていく大は、その演奏で様々な人を惹きつけ、巻き込んでいく。このマンガで大は言葉でのやり取りも難しいヨーロッパに行ったり、全く立場の違う大人とやり取りしたりするのだが、“好き”なジャズや“好き”なサクセスを通して、相手のこころを揺さぶる。『BLUE GIANT』ではちょうど大の思春期・青年期が描かれているが、まさに大はジャズという「窓」を通じてやりとりをしていると考えられよう。だがここで注目すべきは、“好き”という感覚のすさまじさである。大はあまり自身の“好

き”について言葉で理由等を語らないが、大のジャズに没頭する様子として、エゴイスティックで頑固で融通が利かない面はよく描かれ、毎日何時間もサクセスを吹き続ける様子は周囲の人間からすると狂氣的ですらある。こうした大の様子は、大人に求められる社会的な態度が獲得できていない未熟な状態とも言えるかもしれない。一方で大の“好き”に突き動かされて生きる様子は、様々な人を変えていく。ここには、土井が述べた「窓」を通じて周囲を「深く巻き込んでいく」というプロセスがよく表れている。先ほど述べた未熟さや、まさにその時に湧き起こる即時性の高い体験であることも含めて、“好き”という体験は本質的に“なま”であると考えられる。その“なま”由来の感情が、様々な形で「窓」の外にあふれ出すような動きが起こることで、それゆえに「外界」との関係が生じる。つまり、「内界」から「外界」へと生じる動きが“好き”という感情を通じて起こることが『BLUE GIANT』では示唆されている。

大の場合は“好き”という感情や、“好き”に身を任せる姿勢が極端なため、これほどまでに強い感情を表出する例は珍しいかもしれないが、心理療法においても、この“なま”の“好き”を適切に捉えるセラピストの姿勢は重要だろう。“好き”が表現されやすいサブカルチャーについての語りは、“なま”の主体から「窓」の外側への動きに“つながり”やすい。その動きが生じた際に、セラピストがただ静的に見守る姿勢をとるのではなく、適切に巻き込まれることで前章において述べたようなクライアントとの多次元的な“つながり”が生まれるのではなからうか。

IV. 思春期・青年期の在り方としての成虫モデル

ここまで、「窓」の概念をもとに、思春期・青年期のさなぎモデルを参照しつつ、その「内界」を“なま”という語を用いて論じてきた。だが、

現代において、例えば不登校や引きこもりのように外界から閉ざされているような状態にある思春期・青年期のクライアントに関わるうえで、さなぎモデルだけで十分と言えるのであろうか。本章では、さなぎモデルに加えて、竹中（2022）の提示した「殻」のイメージを参照しつつ、現代における“なま”との“つながり”やサブカルチャーの果たす役割について検討したい。

1. 昆虫イメージにおける「殻」

さなぎモデルにおいて成熟とは、“なま”の状態であった“自分”が外界に顕現できる程度に“なま”の状態を脱し、鑄型を破って出てくるプロセスが想定されている。全て“なま”の状態では、心身ともに生物は外の世界で生きていくことができないためである。そしてここでの鑄型や繭は、引きこもる部屋かもしれないし、もっと広く大学のモラトリアム期間のように社会的に立場が保証される制度のようなものかもしれない。この鑄型や繭を破って、本来の“自分”が出てくるのである。この“自分”は外界に適応できるように「皮」（竹中, 2022）を備えている。ここで「皮」という言葉に表現されているように、さなぎから出てくるのは生物としての“ヒト”ないし哺乳類のような“けもの”が想定されていると言えよう。この「皮」はユング（1934）の提唱した「バルソナ」に類するもので「他者に対して適切な印象を与える」と同時に「個人の本来の性質を覆い隠す」とされ、その下に個人の本来の本質が想定されている。人体を例に考えると、ヒトは極論皮を剥いでも生物としての形は保たれる。それは、ヒトが筋肉や骨など様々なものによって複雑に構成されているからである。ただ、“なま”の形を成さない部分が無くなったわけではなく、血のように普段は見えないところに存在している。このように、従来の思春期・青年期のさなぎモデルは、変容のプロセスこそ昆虫の完全変態を参考にしつつ、構造のイメージは昆虫とは異なる。

しかし近年、思春期・青年期臨床の現場では、クライアントの主体の乏しさと脆弱性の問題が指摘されることが多い（北山, 2020; 時岡, 2021）。実際、何かやりたいことや目標・目的があるか尋ねても出て来ないクライアントは珍しくない。冒頭で述べたような、自ら悩むことの難しさもそうした主体の乏しさに関連する状態像とも考えられる。一方で、そうした学生が全く何も話さないというわけではなく、多弁に様々な情報や見聞きしたものについて面接で話したりすることも多い。こうしたクライアントにも、従来のさなぎモデルはそのまま適用され得るのだろうか。竹中（2022）は引きこもり傾向をもつ大学生の事例と小説『コンビニ人間』（村田, 2018）を通して、従来のさなぎイメージとは異なる成虫の「殻」のイメージを提示し、「皮」の下にこそ本質があるという前提に対し、批判的な検討を行っている。竹中は、山中の内閉論を始めとしたさなぎモデルにおいて引きこもりなどの閉じた期間が、成虫として羽化するまでの準備期間として捉えられてきたことに対して、既に成虫となった虫のイメージで思春期・青年期のクライアントを捉えようと試みている。竹中は成虫のイメージについてさなぎと比較し、「サナギのイメージであれば、それを包む繭は幼虫本体とは区別される物質によって作られ、そこに包むものと包まれるものという自他の関係が成立する。一方、成虫の身体を覆う殻（外骨格）は、その身体の一部である。覆いが破れるというイメージは、すなわちその本体の一部がはがされるということを意味し、内側から何か新しい生命が誕生するどころか…（中略）…すっかり形をなくしてしまうだけということにもなりかねない」と述べている。そのうえで、「成虫」のイメージは心理療法に対し、「形を成さない中身」を常に保持したまま、いかに人間社会に生きるかという視点を提供すると指摘している。ここでの「殻」は社会に出る前に脱するもの、従来さなぎや繭のイメージで論じられてきたものとは異なり、正

しく装着してこそ社会に出られるようなものとされ、心理療法においても、中身を適切に覆う「殻」を身につけていく過程が展開される可能性が示唆されている。本論では、竹中の示した「殻」のイメージを伴う心理療法の展開を“成虫モデル”と以降呼称する。

2. 成虫モデルとサブカルチャー

さなぎモデルと、成虫モデルは虫のイメージを共に持ちつつ、様態が大きく異なるものであった。さなぎモデルでは、“なま”の主体が外界に顕現できる程度に“なま”でなくなって外側を覆うものを破って生まれ出てくるイメージを持つ。これはあくまで、主体によって主体が変容していく、言わば“内側”中心のプロセスである。ことに対し、「成虫」モデルでは、“なま”を“なま”のまま残した状態でそれを覆う「殻」を身に着けていくプロセスが想定される。こちらはさなぎモデルとは異なり、“外側”によって主体が形作られていく、“外側”中心のプロセスと言えよう。しかし、どちらも内側には“なま”が存在しているという点では共通しており、その意味で“なま”という概念は両者をつなぐものとして意義があるのではないかと考えられる。

しかし前章までで述べてきた、サブカルチャーを通じた“つながり”はさなぎモデルに準じたものであった。さなぎモデルにおけるサブカルチャーはクライアントの“なま”に“つながる”ための素材・手段という意味合いが強い。当然「成虫」モデルでもさなぎモデルと同様に、サブカルチャーについての語りは、多かれ少なかれクライアント理解に寄与するだろう。しかし、その在り方は同じとは言いがたい。先述したように、現代におけるサブカルチャーは誰もが簡単にアクセスでき、過剰とも言えるほど人々に開かれている。山中は「窓」になり得るものとして「限局した」興味の対象と述べているが、多様なサブカルチャーについて「○○も知っているし、△△も聞いて

ている、××もやっている」と、重み付けなく語るクライアントも一定数存在する。これは、先ほど述べたような“なま”由来の“好き”とは言い難いであろうし、これまで述べてきた心理的に意義のある“つながり”を生むとも考えづらい。では、こうしたサブカルチャーの語りに意味はないのであろうか。竹中の事例では、クライアントの「普通の大学生」という役割が「殻」とされ、「殻」を自覚的に装着し直し、その「殻」を生きぬくことで、自らを知るという人間らしい意識のステータスが獲得されるという変態の在り方が論じられている。先ほど例として挙げたクライアントの語りのように、まるで流行りのサブカルチャーを“履修”するかのような語りからは、何らかのサブカルチャーに接していることが“普通”という認識が多くの人にある可能性が示唆される。そして、“履修”することで“普通”というステータスを得たと感じる者もいるだろう。つまり、サブカルチャーを通じてクライアントが“普通”と“つながる”可能性がある。さらに、サブカルチャーを通じて“普通”という「殻」を装着しようとする在り方を想定することで、そのサブカルチャーに触れざるを得ないクライアントの“なま”の部分もイメージされるのではなかろうか。さなぎモデルのクライアントは、サブカルチャーについて語る過程で“好き”という“なま”があふれ出すが、成虫モデルのクライアントはサブカルチャーについて語らなければ“なま”が漏れ出てしまう、という異なる構図が存在すると考えられる。

3. 仮想空間の発展と「殻」

前節で述べたように、成虫モデルではサブカルチャー自体が「殻」そのものとなり、クライアントそのものを形作るものとなり得る、という視点が生まれる。加えて、昨今のサブカルチャー、特にゲームの領域について触れておきたい。今日では、ゲームにおける自由度が格段に上がり、ゲー

ムの中で動かせる“自分”の解像度も高い。ゲームやネット上の仮想空間における“自分”を表すアバターは、当然“自分”そのものではない。時岡（2018）は、仮想空間では自己完結的な関係が生じやすく、いかに仮想空間で“自分”を感じていても、それはかりそめの“自分”である可能性について述べている。ただ教育機関の臨床現場では、子どもの「ゲーム依存」についての相談も非常に多く、それだけ現代ではゲームの世界に何らかの豊かさが存在しているとも考えられよう。多くのゲーム上では、“自分”をカスタマイズできる。一からアバターを作らなくとも、現実の“自分”に合うと感じるキャラクターを選択することが可能である。そしてゲームをプレイする過程で調整が行われたり、アバターを育てたりしていくことができる。そうした“自分”の“着せ替え”や自らに合うような“調節”の繰り返しを通して、自らを形作る「殻」のモデルを輸入している事例も一定数存在するのではなかろうか。しかし、この作業には仮想空間と現実空間の次元を超えるというプロセスが存在する。「殻」となり得る素材が現実には属していない場合、現実の“なま”を覆い隠すことは可能なのか。つまり、仮想空間の“自分”と現実の“自分”は“つながる”のか。この点については、現在まさに更新されていっている事例や実証研究を通じてさらに検討が重ねられる必要があり、今後の課題としたい。

V. おわりに—サブカルチャーが“つなげる”未来の在り方—

本論では、サブカルチャーが促す“つながり”について検討し、その“つながり”の前提となってきた「窓」の概念について振り返りつつ、その「内界」を“なま”という概念で説明することを試みた。そして、現代の青年期臨床を捉える視点として竹中（2022）が提示した「殻」のイメージや成虫モデルを参照しつつ、思春期・青年期の学生がいかに“なま”を携えた状態で生きていき、

サブカルチャーがそこにどう関わってくるのか検討してきた。さなぎモデルと成虫モデルは、どちらも正しいというものではない。しかし、それぞれのモデルで語られるサブカルチャーは、クライアントにとって異なる意義を持っているものであり、これらのモデルはセラピスト側の構えに有用であろう。

ドラゴンクエストシリーズには「さまようよろい」というモンスターがいる。これは死んだ兵士の怨霊が鎧に宿って動き出すという設定を持つ。さらに、この「さまようよろい」には亜種がたくさんいて、鎧の種類や色が変わることで違うモンスターとなる。そして、こうした設定を持つキャラクターは作品を超えて様々なマンガ・アニメ・ゲームで見られる。これはまさに、比較的最近論じられた成虫モデルで提示された存在様式であるが、サブカルチャーの世界では昔から生み出され続けていたのである。「殻」で生きる在り方は、心理療法の文脈において主体の欠如・乏しさという表現で、否定的に論じられることも未だ多い。ただ多様な価値観を認める動きが盛んで、その価値が流動的に変動する昨今の社会においては、個人の主体が一定の形を成さずに在ること自体が一つの進化・適応の結果とも考えられる。もしかすると、そうした進化・適応の様子を、サブカルチャーは先取りして表現してきていたのかもしれない。その意味では、サブカルチャーは人のこころの在り方と未来との“つながり”さえもち得ると言えるのではなかろうか。

註

- 1) 前提として、英語の *subculture* は *main culture* と対比されるもので、その地において主流ではない“下位”文化を指し、マイノリティの意に通ずる用語であった。しかし、日本ではクラシック音楽や歌舞伎・能のような伝統芸能、純文学のような一定以上の素養・教養が必要となるハイカルチャーに対するものとして、マンガやアニメ、アイドルやポップミュージックのようなものを指すようになった。現在では、ハイカルチャーと同等の影響を持つもの

- として“サブ”カルチャーではなく“ポップ（大衆）”カルチャーと呼称されることもある。本論では、サブカルチャーという語に統一して論じる。
- 2) 本論では、心理的な支援の場に訪れる来談者を総じてクライアントと呼称する。
 - 3) 本論では、心理的な支援を行う専門家を総じてセラピストと呼称する。
 - 4) ここで言う「同質性」とは、単に「同じ」ということではなく、「双子」や「分身」のイメージがそうであるように「同じであることと違っていることの同時性」「つながっていることと切れていることの同時性」（田中, 2017）という意味を持つ。

文 献

- 馬場禮子 1999 精神分析的な心理療法の実践 岩崎学術出版社
- 土井孝則 2021 さなぎの中で遊ぶこと—「さなぎ」におけるセラピストの役割の諸相— 臨床ユング心理学研究 7(1) 5-15
- 土井孝則 2022 さなぎは関係を欲する—さなぎ理論における他者との関係— 学習院大学人文科学研究所「人文」 20 9-19
- Hatanaka, C., Kawai, T., Tanaka, Y., Konakawa, H., Suzuki, Y. & Makian, N. 2023 Paradoxical nature of narrative in analytical psychotherapy *The European Journal of Social Science Research* 36(1) 45-58
- 岩宮恵子 2013 好きな人にはワケがある 宮崎アニメと思春期のころ ちくまプリマー新書
- Jung, C. G. 1934 *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewussten* GW7 Walter Verlag
- 川部哲也 2023 『葬送のフリーレン』から共感を考える ユング心理学研究 15 77-87
- 河合隼雄 1987 明恵 夢を生きる 京都松柏社
- 河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店
- 河合俊雄・岩宮恵子 2023 討論—基調講演を受けて 日本ユング心理学会 共感力のゆくえ ユング心理学研究 15 45-56
- 北山純 2020 主体性を育む場としての学生相談室 学生相談研究 41(2) 85-94
- 村田沙耶香 2018 コンビニ人間 文春文庫
- 長谷雄太 2023 心理臨床における枠と関係の多層性—教育機関臨床を通じて— 甲南大学学生相談室紀要 30 21-34
- 成田善弘 1989 青年期境界例 金剛出版
- 成田善弘 1999 共感と解釈—患者と治療者の共通体験の探索 成田善弘・氏原寛（編）共感と解釈—続・臨床の現場から— 人文書院
- 鳴岩伸生 2017 心理療法における「共感」概念について 京都光華女子大学京都光華女子短期大学研究紀要 55 125-139
- 名取琢自 2020 「異界」は潜伏期に入ったのか？ 異世界転生アニメに見えるもの ユング心理学研究 12 111-117
- 西村則昭 2004 少女漫画『天使禁猟区』と思春期女子の心理臨床 心理臨床学研究 22(2) 105-116
- 大澤尚也・水野鮎子・渡部智行・小島純一・境明徳・嶋見優希・星野春香 2021 思春期の心理療法プロセスにおける漫画・アニメの作用に関する研究：臨床心理学における漫画・アニメに関する文献研究から 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 24 40-44
- Rogers, C.R. 1957 The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change *Journal of Counseling Psychology* 21(2) 95-103 伊東博（訳）2001 セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件 伊東博・村山正治（監訳）ロジャーズ選集（上）誠信書房
- 坂部恵 1985 かたりとしじま——ポイエーシス論への一視角 いま哲学とは 新岩波講座・哲学第1巻 岩波書店 213-239
- 笹倉尚子 2010 漫画やアニメについて他者に語るプロセス 心理臨床学研究 28(1) 16-27
- 笹倉尚子 2022 思春期の異界とサブカルチャー—触媒、あるいは器として 精神療法 48(1) 40-43
- 笹倉尚子 2023 サブカルチャーのころ オタクなカウンセラーがまじめに語ってみた 木立の文庫
- 高石恭子 2009 現代学生のころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究 15 79-88
- 竹中菜苗 2022 ある不登校の大学生の事例が示した「殻」イメージの重要性—臨床事例および小説「コンビニ人間」の検討を通して 臨床ユング心理学研究 8(1) 47-58
- 田中康裕 2017 心理療法の未来 その自己展開と終焉について 創元社
- 時岡良太 2018 「自分」とは何か 日常語による心理臨床学的探求の試み 創元社
- 時岡良太 2021 主体性の乏しい学生との面接過程—カウンセラーが居続けることの重要性— 学生相談研究 42(1) 12-21
- 山中襄太 1993 国語語源辞典 校倉書房
- 山中康裕 1987 思春期内閉—治療実践からみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理— 中井久夫・山中康裕 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社

ABSTRACT

A Considerlation of Subcultures and “Connections”

NAGATANI, Yuta

Konan University

This paper examines the multidimensional “connection” that arise through subcultures. Recent studies on subcultures often assume the concept of “window”. This study discusses the state of the “inner world” in the “window” concept, focusing on the concept of “nama”. In contrast to the “chrysalis model” of the traditional “window” theory, a model that assumes the structure of the “adult insect” is considered to be useful for understanding the client in modern times. “Nama” is useful as a concept that connects these two models. Furthermore, it was suggested that it is necessary for therapists to change the way they relate to clients according to the model.

Key Words : subcultures, connection, “nama”
